

石井さんについて

浜田 明範*

2010年4月より京都大学に転任することになった石井さんに語りつくせぬ恩を受けた院生を代表して、改めてこの場でお礼を述べたいと思う。2006年4月に一橋大学に赴任された石井さんには、4年の間、本当にたくさんのことを教えて頂いた。たぶん、石井さんと僕を含めた「年寄りの」院生との関係は、一般的な教師と学生との関係とは少し異なっていたのだと思う。ここで「石井先生」と書かずに、あえて「石井さん」と呼ばせて頂くことで、その辺の事情を少しでも読者の方に伝えられればと思う。

院生というものは、新しい先生が赴任されてくる時とにかく期待と不安が綱交ぜになった感情を抱くものだが、石井さんが赴任された時の私たちはまさにそんな状態だった。いや、率直に言って、私たちはどちらかというとより多くの不安を抱えていた。指導に当たっていた3人の先生のうち年長の2人が同時に研究室を去られたのだから、それも無理からぬことだろう。

そんな私たちの不安を、石井さんはたったの二時間足らずの原稿検討会で鮮烈に振り払った。まだ、それほど個々の院生の状況も分かっていなかったであろうに、即興で手際良くベターな構成を提示していく石井さんを目の当たりにし、不安は驚愕へ、驚愕は期待へと変わっていった。あの時のことは、今でも私たちの語り草になっている。その後も、繰り返しの確なアドバイスを下さる石井さんからは、時に恐怖を抱くほどの「特別な才能」を見せ付けられてきた。

一方で、石井さんのトレードマークとも言えるような、ほんわかとした笑顔と口調は締め切りに終われ心身ともに疲弊している私たちを事あるごとに癒してくれた。そんな石井さんの親しみやすさを示すこんなエピソードがある。ある時、石井さんの学部生向けの講義を院生が担当するということがあった。その時、院生の講義の様子を後ろに座って見ていた石井さんに、隣に座っていた学部生がこう尋ねたという。「あの、この授業ずっと出てますか？」と。おそらく、担当教員の顔さえ覚えていなかったさぼりがちの学生は、ノートのコピーでも依頼するつもりだったのだろう。その学生の間抜けっぷりはともかく、普段の石井さんが、学部生に間違われるほどに若々しく、ノートのコピーを頼まれるほどに親しみやすいオーラに溢れていることをこれほどよく示すエピソードはないだろう。

また、石井さんは教師という立場に基づいて上からものを言うというよりは、院生と対等な立場で議論することを望んでおられたように思う。ゼミで講読する文献を学生から募集するのは常だったし、赴任してからほどなくして、メーリングリストを通して、「先生」

* 日本学術振興会特別研究員(PD)

と呼ぶことを「制度的に廃止する」と宣言されたことも、そんな石井さんの意思の表れだったのだろう。あるいは、それほど年の離れていない私たちに対する石井さん一流の心遣いだったのかもしれない。いずれにしても、力量不足の私たちがそんな石井さんの期待に最後まで応えることができなかったことは、最大の心残りである。

同時に、石井さんのためのいくつものお祝いに立ち会い、多くの幸せのお裾分けにあずかる機会を得られたことも、私たちにとってはかけがえの無い大きな頂きものだった。特に、最初のご著書である『精霊たちのフロンティア』が出版された際に研究室で行ったパーティーや同書が澁澤賞に選出された際に東京駅近くのセレクトな催事場で行われた授賞式に参加できたことは、思い出深い。博士論文を著書として出版すること、それが表彰されること。私たちが目指すべき未来の姿を何度も繰り返し見せていただいた。

研究者としてのあるべき姿を見せてくれたという点からすると、私たちは数々の真剣勝負を目の当たりにすることもできた。例えば、本誌 vol.3 に掲載された近藤英俊氏の書評とそれに対する応答や、2008 年 11 月に開催された研究会「POP AFRICA」における質疑応答の際には、本物の研究者が真剣で鏖迫り合いをする際の、まさに命のやり取りをするような強烈な緊迫感と凄みを見せてくれた。

そんな真剣勝負をさせて頂ける日が来ることを目指して研鑽を続けていくことが、今まで受けてきた語りつくせぬ恩を返すことになるかと信じて、日々の生活を有意義に過ごしていければと思う。